

アクション・リサーチによる教授者の内的変化と授業改善の検証

－現職教員研修をととして－

高校教育研修課 指導主事 泉 恵美子

要 旨

本研究では、Teacher Training（現職教員研修）にアクション・リサーチを取り入れて研修する中で、教授者が自ら授業分析を行い、問題を掘り下げて課題を明確にし、その解決を目指して自己の内的変化と授業改善をおこすことができるかどうかを検証することを目的としている。本年度、当所で「小・中・高等学校国際理解のための英語研究講座」を実施し、講座を通じて受講者の授業への取り組みや内的変化を見ながら、アクション・リサーチが受講者に与える影響と、その有効性について考察した。

その結果、アクション・リサーチは教授者の内面に変化をもたらし、自分を厳しく観察する眼が生まれ、授業を計画、実践・観察、内省・分析する過程を通して、授業の改善につながる事が検証できた。

はじめに

授業の中で教授者の役割は大きく、日々新たな発見や改善が繰り返され、それに基づいて質的向上が図られなければならない。しかしながら、教授者が授業や生徒へフィードバックすることを目的に、自己をモニタリングして内省する機会が少ないのが現状である。

そこで、当研修所の教員研修講座では、大学の英語教育専門の教員と連携を取り、アクション・リサーチの手法を取り入れた指導を半年間行った。そして、協同的な対話を通して現在の授業を見つめ直すとともに、授業実践の中で、アクション・リサーチを自己改革、授業改革に役立ててもらい、その効果を検証した。

1 アクション・リサーチの理論と実際

－英語教育の目指すべき教育観、学習観、生徒観－

(1) アクション・リサーチの定義

アクション・リサーチは、90年代に入ってからさまざまな分野で脚光を浴び、研究が進んでいる。その定義は以下のとおりである。

Action research refers to teacher-initiated classroom investigation which seeks to increase the teacher's understanding of classroom teaching and learning, and to bring about change in classroom practice. Action research typically involves small-scale investigative projects in the teacher's own classroom, and consists of a number of phases, which often recur in cycles: Planning, Action, Observation and Reflection. (Richards and Lockhart, 1994:12)¹⁾

また佐野（2000:31）²⁾は、「教師が授業を進めながら生徒や同僚の力も借りて、自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことにより、授業を改善し

てゆく授業研究の方法」と説明し、

- (1) 反省に基づく授業実践を繰り返すことにより、自分の授業を改善していくことを第1とする授業研究の立場
 - (2) 学校や地域の教師集団が協力して、ある課題を追求することにより、カリキュラムや評価ばかりでなく、学校運営などの教育改革にも反映しようとする立場
 - (3) 応用言語学や言語習得理論に基づく仮説を授業実践を通じて検証し、関連学問に貢献しようとする立場が、それぞれ重なり合い存在する。
- としている。

(2) 教師の内省につながるアクション・リサーチ

これまで授業は教師と生徒と教材があれば存在し、教師は知識を伝達し、生徒は知識を受容し記憶することが重視されがちであった。また教師も経験の蓄積によって現状に満足し、自己の授業や教授方法等を振り返ることも怠りがちである。しかし、教育実践をする上での中心は生徒であり、生徒が自ら主体的に学び、知識を統合・発展・構築していく過程が大切である。

また、教師は生徒の能力や適性を伸ばし、学びを支援していく一方、教師自身も学び手として、生徒とともに成長することが望まれる。教師が、個々の生徒に目を配り、個性に応じて指導していく視点と、教室をダイナミックな学びの場として設定し、分析を行い、より良い活動が行われるように授業内容や指導方法を組替えていく必要がある。その際、アクション・リサーチは指導技術を改善したいと思っている教師自身の内

省につながる有効な手段となり、日々の授業に風穴を開ける助けになる。また、時代の急変によってこれまでの経験や理論が通用せず、授業がうまくいかずに困ったり、生徒のコントロールに苦労したり、他とやり方が違うことに悩んでいる教師にとっては、アクション・リサーチは貴重な体験になると言える。

2 現職教員研修の在り方と研究目的

(1) アクション・リサーチに取り組むにあたって

アクション・リサーチに取り組むにあたり、チームによるサポートグループを考案した。またアクション・リサーチの方法として、佐野 (2000)²⁾ は以下の手順(①)を示しているが、本研究講座では観察やジャーナルによる内省をより重視した人間学的な手法を採用した。すなわち、教師のジャーナルによる自己内省と生徒観察を主たる研究材料とし、グループでジャーナルを交換して、より客観的に授業を見つめることに主眼を置いた(②)。そして、教師が批判的省察を加えることにより、自己点検を行う習慣が身につくと考えた。

①	1 問題の確定 (Problem Identification) 2 予備的調査 (Preliminary Investigation) 3 仮説の設定 (Hypothesis) 4 計画の実践 (Plan Intervention) 5 結果の検証 (Outcome) 6 報告 (Reporting)
②	1 自己評価、内省、アセスメント 2 問題把握 3 課題(目標)設定 計画 (Plan) 4 実践・観察 (Act, Observe) (モニタリング) ← パートナー、グループのサポート (非難せず、誉める。質問する。) ↓ 5 振り返りと形成的評価 内省・分析 (Reflect) 6 総括的評価

(2) 今年度の英語教員研修プログラム

① 教員研修の現状と課題

『英語が使える日本人』を育成するための戦略構想—英語力・国語力増進プラン— (2002)³⁾ により、来年度から5年間で全英語教員の研修が予定され、教員としての資質、英語力と指導技術の向上が重点課題としてあげられている。

また、英語教員研修研究会(2002)⁴⁾ の報告によると、

- ・ 教員の研修場所としては、公立教育研修センターが適当である。

- ・ 望ましい研修期間は「1年間定期的・継続的」「1学期程度」「1週間程度」の順であり、方法論の検討が必要である。
- ・ 研修内容として中学校教員には「生徒指導や教科指導」「評価に関する知識や評価方法」、高等学校教員には「外国人とのTTや自らの英語コミュニケーション能力の研修」が必要である。
- ・ 教科内研修では授業改善を目指した「授業の相互公開」「相互批判」「問題点の協議」など、アクション・リサーチの授業改善法はまだ一般的でない。

と指摘されている。

そこで、Bailey (1996)⁵⁾ が有効性を強調している Collaborative peer dialogue (協同者との対話) を取り入れ、かつ Bailey, Curtis and Nunan (2001)⁶⁾ が推奨している以下のような教員訓練の内容を研修講座に生かすなど、望ましい研修の在り方を検討し実施した。

- ・ Self-awareness and self-observation (自己意識と自己観察)
- ・ Reflective teaching (内省的教授)
- ・ Teaching journals (指導ジャーナル)
- ・ Using cases (事例研究)
- ・ Language learning experience (言語学習体験)
- ・ Video: seeing ourselves as others see us (ビデオ: 客観的観察)
- ・ Action research: in-class investigation (アクション・リサーチ: 授業内調査)
- ・ Peer observation (同僚の観察)
- ・ Team-teaching (チーム・ティーチング)
- ・ Mentoring and coaching (助言と指導)
- ・ Teaching portfolio (教授ポートフォリオ)

② 研究仮説の設定

今年度の研修では次のような研究仮説をたてた。

- 1 アクション・リサーチを通して、長期的・継続的な研修を行い、日頃の授業を分析することにより、教授者に内的変化が起きる。
- 2 教授者の意識の変革により、結果として授業の改善に至る。
- 3 ペアやグループの協同者との対話を実施し、支援体制をとることによって内省が深まる。
- 4 大学の教員による指導と連携を通して、より専門的な研修となるとともに、小・中・高・大・社を見通した英語教育の在り方について考察する。

3 研究の内容と実践

- (1) 研究方法: 研究講座受講者の授業での英語指導を約半年間にわたり分析するとともに、サポートグループで支援・協力して課題解決を進めていく過程を観察・

調査した。そして、データとして受講者より提出された指導ジャーナル、授業記録、調査やアンケート、音声録音、録画ビデオ、最後の研究講座で発表した研究報告、さらに講座担当者や大学教員による観察及びアンケートにより、その効果を検証した。

(2) 対象者：現職教員研修「小・中・高 国際理解のための英語研究講座」受講者20名（小学校教員5名、中学校教員5名、高等学校教員10名）

(3) 研究講座の内容

① 事前指導と課題

ア アンケートによる実態把握

研究講座を始めるに先立ち、研修とアクション・リサーチに関するアンケートを実施した。その結果、アクション・リサーチについてよく理解している受講者が1名、聞いたことがある受講者が8名、全く知らない受講者が半数以上（11名）いた。

また、授業改善を行いたいこととして、小学校では

- ・児童の活動の場面を増やしたい。
- ・児童が興味を引く学習内容を組み立て、楽しく学ばせたい。
- ・子どもの意欲を引き出す効果的なTTをしたい。

など、児童との関わりを重視し、興味を引き出し楽しく学ばせたいとの意向がうかがわれた。中学校では、

- ・効果的なゲームやペアワークを取り入れたい。
- ・生徒に英語で活発に発言させたい。活気のあるクラスにしたい。 ・板書を改善したい。
- ・授業についてゆっくり考えたい。

など、指導技術やコミュニケーションを意識した授業への希望がうかがわれた。また、高等学校では、

- ・授業のテンポ、指導方法
- ・読解授業における内容把握のさせ方
- ・発問の仕方、板書、説明の仕方
- ・リーディングの指導法
- ・生徒の理解度や学習到達度の測定方法
- ・実践的コミュニケーション能力と入試との関連

など、読解や評価、入試に関するものなど多岐にわたり、校種間の違いが顕著に見られた。

イ 指導案とビデオ撮影、その後の授業分析

受講者には、レッスン1時間分の指導案と、それに基づく授業をビデオに撮り、授業後のまとめと感想の提出を課題とした。提出された資料には、今回の研修で指導助言を依頼した神戸市立外国語大学の玉井健助教授と筆者があらかじめ目を通してコメントを書き、以後のジャーナルの書き方の指導につないだ。その際、

授業の良し悪しの評価ではなく、自分の授業を振り返り分析する視点を提示することが大切であると伝えた。

このタスクの目的は、

(ア) 授業案を作成することによって、授業の目標やポイントを考える。

(イ) 授業を撮影して視聴することによって、教師・生徒の発言や行動の中に普段気づかないことを発見する。

(ウ) 授業分析により、内省を行う。

(エ) 指導者によるコメントを読むことによって、授業を分析する視点を知ってもらう。

ことなどである。これらを通して、受講者は第1回の研修までにアクション・リサーチへの意識を高め、その手法を体験することになった。実際、書物等でアクション・リサーチについて事前に調べたり、撮影した授業を各自で振り返ったりしたことは大変勉強になったとの感想が多かった。（参考資料1）

② 第1回研究講座（6月24日（月）～25日（火））

アクション・リサーチに関する研修を開始した。コミュニティ作りをねらいとした英語エンカウンターゲームをウォームアップとし、言葉が通じない状況を設定して、異文化を理解するための実体験を行った。2国に分かれてそれぞれの言語を練習した後、はじめて対面した相手国の人と交流を図るものである。活動後の感想では、言葉が通じないときの不安、焦り、忍耐と理解でき始めたときの喜びや感激、自分の国や仲間に対する愛着、異質なものに対する抵抗感など複雑な感情が表出した。また、話し言葉のニュアンスで相手国に対してステレオタイプの印象を抱いたことなど様々な感想が出され、当初予想したとおり、初めて遭遇する異文化に対して戸惑いやコミュニケーションが成立したときの達成感が共有された。国際理解は異文化理解、他者理解であり、それは生徒理解、自己理解につながるとの位置付けで取り組んだ。

次に、過去を振り返り、受講者自身の教師としての経歴、強さ、弱さを話しあった。また、現在の自分を見つめ、改善したい問題点を分析するとともに、自分と外国語との関係を画用紙に色マジックで図示し、それに基づいて発表を行い、カウンセリング技法による自己理解と問題の洗い出しへとつなげる体験実習を行った。

その後、理想の教師像について議論し、教師の必要とされる資質について態度（Attitude）、技術（Skill）、

知識 (Knowledge)、意識 (Awareness) の面からまとめ、ジャーナルを書く分析視点として示した。

次に、教授者はあまり語らず、生徒に発言を促すことが大切であることを理解するために、人道主義的な教授法である Silent Way を実習し、アクション・リサーチも同様に人を理解していく過程を経ることが重要であることを伝えた。

最後に、アクション・リサーチの導入と内容の説明を行い、自分を観察し振り返る訓練をするためにジャーナルをつけることを確認するとともに、第2回までの課題を提示した。主な内容は次のとおりである。

ア ジャーナルの書き方指導

- ・毎時間テーマを決める。
- ・生徒との関係や気づいたこと、自分の疑問や思い、授業の内容から生徒の反応などを記載する。フォーカスされていなくても良い。
- ・事実を記述する。
- ・生徒一人ひとりの変化をモニターして、学習者への理解を深める。

イ 自分や生徒を見る視点とポイントの説明

- ・同調・理解 (tune-in)、敏感な感知 (sensitization) が大切であり、教師側の対人的な基本姿勢が変わることで、生徒観や教育観が変わる。
- ・観察の解釈 (interpretation) がアクション・リサーチのポイントであり、相手の変化・結果はどうかを深めて考察する。
- ・自分自身を探求 (explore) するプロセスを促進する。
- ・変化 (change) に対する意識 (awareness) を持つ。
- ・テストの点ではなく、生徒の表情や学習者からのフィードバックを中心に、ジャーナルやビデオをとるなど様々なデータを保管し、分析し、アセスメントを行う。

ウ 論文作成の意図：自身の変化を知ることが目的。

エ サポートグループの決定：ペアか3人グループ。サポートグループにより、教師に相手を理解しようとする態度を育て、生徒理解につなげることをねらった。

オ 第2回研究講座への準備 (個人研修と課題)

2回目の研究講座に向けて、6月26日 (火) ～7月5日 (金) までの8日間、受講者は以下の内容に取り組んだ。

- ・毎日授業のテーマを決定し、授業をモニターする。
- ・授業に関するジャーナルを書いて、サポートグループのメンバー (協同対話者) に送る。
(手段：メール、Fax 等、使用言語：英語か

日本語)

- ・協同対話者は簡単にコメントを書いて返信する。(自分が詳しく知りたいこと、疑問点などを書く。評価は避ける。この点はどうでしたか、このとき他の生徒はどうしていたのでしょうか等)
- ・終わった段階でジャーナルをまとめて筆者まで送る。

③ 第2回研究講座 (7月29日 (月) ～30日 (火))

8日間のジャーナルのまとめを、サポートグループで報告し合った。次に受講者全員でシェアリングを行った後、焦点化したいことを協議し、研究課題を確定した。研究課題は、小学校教員においては適切な発問と指示、中学校教員ではコミュニケーションな授業、高等学校教員では読解指導に関することが主であった。(参考資料2)

④ アクション・リサーチの実施

9月から10月末までの2ヶ月間アクション・リサーチを実施し、ノートにメモを書き続け、結果をまとめて11月に発表した。手順としては次のとおりである。

- ・授業の選定 「今日の私のテーマ」を決定
- ・実践
- ・内省してジャーナルに記入
- ・ジャーナルの交換
- ・生徒からのフィードバック、アンケート、録画等による分析

テーマに関する2つの視点として、

- ① **生徒の変化** 例) 語彙が増えるか。理解が良くなるか。
- ② **教授者の変化** 例) 生徒に対する理解や反応が変わったか。態度が変わったか。(「生徒一人一人への私の関わり方」「生徒への言葉かけ」「指導法」「評価」等)

を必ず入れることが必要である。

目指すべき方向は、物事の問題を明確にして考える姿勢、研究者としての教師 (Teacher as a researcher) の視点、新たなアイデンティティーの獲得である。地味でも自分が意図した授業や活動ができるか否かが大切だと強調した。

⑤ 研修支援体制

9月2日、受講者にメールとFAXを送り、第3回の課題とアクション・リサーチによる研究の継続を奨励した。また、研修のコーディネーターとして、受講者とメールリストを作成し、随時指示や連絡を行った。また指導助言者の玉井助教授との打ち合わせは、

研修当日を除き10回に及んだ。その内容は研究の流れの確認、講座の指示内容の検討、受講者のアクション・リサーチによる研修の進行状況の報告と確認等である。

⑥ 第3回研究講座（11月11日（月）～12日（火））

研究発表とまとめ、アクション・リサーチの振り返りを行った。

全員で、アクション・リサーチで苦労したこと、得たこと等のシェアリングを行い、次にサポートグループで研究成果とまとめを発表しあい、説明で不明瞭な箇所や疑問点等を指摘しあった。その後、研究の成果を模造紙に図示してまとめ、1人15分づつ発表した。

課題に沿った実践的研究の中から理論が生まれ、各自が葛藤の中で最終的に様々な結論に到達した。

4 結果の考察

(1) 教授者の内的変化の有無（研究仮説1）

受講者は、第1回から第3回まで、約半年間アクション・リサーチに取り組んだ。アンケートの回答から代表的なものをいくつか引用する。（参考資料3）

- ・自分を客観視し、生徒の言動と心理に目を向け、授業内容を平素から自然に検討する習慣がついた。
- ・授業を振り返って試行錯誤することの大切さ、それを続けていくことの必要性を感じた。
- ・新たな課題が与えられ、無意識に避けていた課題に向き合う気持ちが持てるようになった。
- ・自分を振り返ることができた。
- ・自分が見えてきた。自分が見えてこそ、その自分を見ている子ども、教材等が見えてくる。
- ・変わらなくてはダメだと考えるようになり、変わるための第1歩を踏み出すことができた。
- ・自分に対する厳しさと同時にいたわりの必要性を感じた。無理のない効率的な指導が生徒にも教師にも有効なのだと感じられる広い視野の持ち方を学んだ。
- ・自分を変えるヒントはどこにでもあった。
- ・生徒を主体的に動かすためにプリントを改善するという観点から授業を見つめ直したが、生徒の様子を見ているうちに、活動に対する説明、指示の出し方、評価の仕方など、生徒との関わり方（人間関係）に問題があるのではないか、授業中の無機質な雰囲気が生徒が主体的に動けない原因の一つではないかと思った。

これらの記述から考察すると、下線部のように自己を客観的に見つめ、鋭い視点で分析していることがわかる。最終的に授業の検証によって振り返っている対象は、生徒の反応を通しての教師自身であり、自身の問題点から目をそらさず、追究しようとする姿勢が見られる。

人により自分の心を開放し、反省することは難しくうまくいかない事も多いが、本研究では感想や第3回の研究講座の発表、ジャーナル等から、個人差はあるものの20人ほぼ全員において生徒や自分の中で考え方に変化が起これ、それを自覚し変わろうと努力している姿が見て取れ、最終的には教師観・生徒観が変わるという成果をもたらしたと言える。従って研究仮説1のとおり「アクション・リサーチを通して、長期的・継続的な研修を行い、日頃の授業を分析することにより、教授者に内的変化が起きる。」と推察される。

(2) 授業改善の検証（研究仮説2）

次に、授業ではどのような改善が試みられたかを検証したい。いくつかの受講者の記述や報告を抜粋してみる。

- ・目標（テーマ）に向かって実践する中で、知らず知らずのうちに自分の授業改善ができていた。それが児童にも良い変化を生んだ。自分の弱点を知り、良くしようと努力できた。
- ・これまでの授業を考え直す良い機会となった。生徒が英語を分かりたいと気づき努力した。
- ・テーマ設定をする習慣がついて、前時でのつまずき・失敗を生徒や自らの忙しさのせいではなく自分の失敗だと素直に思えるようになった。
- ・授業が計画とおりに進まず自信をなくす中、待つという課題を自分に与え、不安を乗り越えて新たな良い授業スタイルを見つけ出すことができた。
- ・理解される授業はどうしたらできるか、それは動機づけだったように思う。生徒が何かを引き出すまでゆっくり待つ姿勢を持たねばならないし、話し方・板書計画に工夫を加え、引き続き文法のわかりやすい説明の仕方等について研究を続けたい。
- ・これまで気にも留めていなかった生徒の表情や態度がどういう意味を持つか考え、積極的に授業改善を図ろうという姿勢を持てるようになった。
- ・生徒と教師が信頼しあい、共に授業を作り上げるという原点を思い起こしたリサーチだった。
- ・やる気になり、努力すれば授業が理解でき、課題が達成できるという感動に到達する経験を生徒にさせる糸口作りが教師に課せられた課題の一つであると再認識した。

それぞれにおいて授業の中で生徒との関係を模索したり、指導方法にも工夫がなされたりしている。また観察を通してある生徒の行動に気づいても、その背景にある意味を考え、問題を分析できなければ改善はなく、その一連の作業はかなり高度な能力を要求するが、ほとんどの受講者が行うことができた。そして、具体的には読解指導における説明の仕方や板書、発問方法、

音読方法を変えるなど、実践を通して技術の向上が図られている。

以上のような報告から、

①教授者の内面が変化することに伴い、授業の計画や実践にもゆとりが生まれ、毎時間の teaching objectives (教授目標) と learning objectives (学習目標) が明確になった。

②しっかりした授業計画のもとで、授業中も自分や生徒の言動に対して敏感にモニター機能が働き、客観的な自己観察や自己評価を行うとともに、生徒への励ましや良質のフィードバックができたことなど授業スタイルが変わった。

③また、その後の内省・分析のプロセスを繰り返すことによって、新たな課題を設定し、反省点と改善点を常に意識しながら実践に移す過程を経て、徐々に授業の改善につながった。

④更に、観察眼が鋭くなるにつれて様々な工夫を重ね、発見や気づきが増し、授業内容、生徒との関わり方、指導技術、教材開発能力が向上したと考えられる。

従って、研究仮説2のように「教授者の意識の改革により、結果として授業の改善に至る。」ものとなったと推察する。

(3) 協同的対話の効果 (研究仮説3)

研究仮説3「協同者との対話を実施し、支援体制をとることによって、内省が深まる。」についても、以下のようにその必要性を認識した意見が多い。

- ・思ってもみないコメントが返ってきて新たな視点が示された。
- ・仲間で支えあってできた。
- ・いろんな情報交換ができた。
- ・自己反省には辛い面があり、書くことも大変で思うようにできず、頭の中でぐるぐる回っているだけのことが多かったが、『継続は力』と改めて思う。また自分を変えるのは自分の意思だということと同時に、相談に乗ってくださった先生のおかげで、支え合う関係の大切さも感じた。

ジャーナルの交換において、協同者の存在が大きな支えとなり、本人が気づかない視点が示されたことなどによって、自らの思考と分析を深めていくことが可能になったと考える。また、インターネットなどを用いてサポートグループ体制がうまく機能したことにより、ピアサポートが互いの自己啓発、気づきに大変有効であることがわかった。

(4) 異校種間連携の有効性 (研究仮説4)

研究仮説4については、仮説を支持する意見が多く、

- ・小・中・高どの校種の先生も同じ悩み、同じ目標を持っていることを知った。

などのコメントがあった。小学校と中・高等学校との間には英語という教科の壁があったが、小学校教員の児童生徒理解や柔軟な発想から、中・高等学校教員も多くのことを学ぶことができた。また、小学校から大学までを視野に入れた英語教育の在り方を検討する機会もあり大変有効であった。「境界の透過性」を強調し、様々な校種の教師が同じ研修を受講する中で、研修の効果が上がると考える。今後はこうした研修の方法と内容を更に検討したい。

一方、玉井助教授に半年間にわたって指導助言を仰いだことで、より高い専門性と幅広い知見が示され、研修の効果が深められた。県教育委員会においても高大連携の推進・拡充を図っており、教員研修でも一層の充実をめざして今後も取り組みたい。

(5) その他の考察

その他の成果として、次のようなことも挙げられる。

①アクション・リサーチは英語教員のみならず、授業研究で大変効果がある。アクション・リサーチを通して、自分の心を開くことにより、問題を明確にして深く洞察する姿勢や、学習者・教授者・研究者としての視点、新たな自己の構築につながった。また、「気づき」から行動へ移すことができたとき、「教室」が変わり、教師主導から生徒主体の授業になり、生徒の反応を待ったり引き出したりするような工夫がなされるようになった。

②アクション・リサーチによる授業分析が、教師の授業分析や批判的省察の能力、資質の向上をもたらし、自立した教師をつくることに役立った。受講した20人全員が研究の有効性をあげ、取り組んでよかったと述べている。

③学級経営にとっても役立ったとの声があった。

④人間中心のアプローチによる研修プログラムにより、人間関係にかかわる技能と、協議する技能が高まった。また、聴くことと同時に言葉によらない他のコミュニケーション力に関心が向き、協力的、相互的、体験的、参加型の研修において、経験的に理論づけようとする姿が見られた。更には自分の視点や世界観の限界と、

裏にある思い込みに気づかせるような手法を用いることで生じるある種のカルチャーショックは、教師が個人的にも職業的にも変革を遂げる引き金になると言う指摘があるが、その点も確認できた。

一方で、これらの成果については量的な検証ではないため、信頼性、妥当性の点で一般化しにくい、あるいは説得力に欠けるとの指摘もあるが、質的手法と量的手法の両方を組み合わせながら、更に研究の期間を1年にするなど延長し進めることによって実証できるものとする。

5 今後の課題

今後の教員研修の課題として、次のような点が挙げられる。

- (1) アクション・リサーチを取り入れた、自己研修方法の確立と支援体制作り
- (2) 量的研究と質的研究の両方の視点をふまえた授業研究の探求
- (3) 総合的な英語教員研修マニュアルの作成
- (4) 小・中・高の連携の方法、方向性

今後、各教師が目指すべき方向として、内省できる自己を構築した上で、理論と実践の融合によって、自らのスキルアップを図り、あわせて研修しつづけることが大切である。(参考資料4)¹⁾

おわりに

本研究を通して、「教師が変われば授業が変わる。授業が変われば生徒が変わる。」ことを実感した。授業を変えたくても変えられない、どこが悪いかわからないといった漠然としていた事柄が明確にとらえられ、変わるきっかけ作りができたのではないかと考える。その手助けができたのであれば幸いである。短期間ではあったが、積極的に研究講座に参加して、各自の課題を精査し、実践の中から自らの理論を築かれた20名の先生方と、1年間アクション・リサーチの指導助言をいただいた玉井助教授に心から感謝したい。アクション・リサーチに終わりはない。さらなる課題を発見し、日々の授業実践の中で研究を続けることによって、自己研鑽を行い、教員として専門的知識の習得と指導技術、資質の向上が目指せると考える。また筆者自身としても、受講者にとって有益な研修の在り方を探ると

ともに、研修シラバスを開発・提供することができればと考えている。

なお、受講者の研修成果については別に冊子にまとめているので、参考にさせていただきたい。

引用・参考文献

- 1) Richards, J. & C. Lockhart. *Reflective Teaching in Second Language Classrooms*. Cambridge: Cambridge University Press(CUP). (1994)
- 2) 佐野正之(編著)『アクション・リサーチのすすめー新しい英語授業研究ー』英語教育21世紀叢書。大修館書店(2000)
- 3) 文部科学省「『英語が使える日本人』を育成するための戦略構想ー英語力・国語力増進プランー」(2002)
- 4) 英語教員研修研究会.『現職英語教員の教育研修の実体と将来像に関する総合的研究；平成13年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』(2002)
- 5) Baily, F. The role of collaborative dialogue in teacher education. In D. Freeman & J. Richards, *Teacher Learning in Language Teaching*. Cambridge: CUP, pp260-280 (1996)
- 6) Baily, K., A. Curtis & D. Nunan. *Pursuing Professional Development*. Heinle & Heinle/Thomson Learning. (2001)
- 7) Wallace, M.J. *Training Foreign Language Teachers: A Reflective Approach*. Cambridge: CUP. (1991)
- ・Freeman, D. & J. Richards. *Teacher Learning in Language Teaching*. Cambridge: CUP. (1996)
- ・Graves, K.(ed.) *Teachers as course developers*. Cambridge: CUP. (1996)
- ・James, P. *Teachers in Action-Tasks for in-service language teacher education and development*. Cambridge: CUP. (2001)
- ・Johnson, K & P. Golombek. *Teachers' Narrative Inquiry as Professional Development*. Cambridge: CUP. (2002)
- ・Wallace, M.J. *Action Research for Language Teachers*. Cambridge: CUP. (1998)
- ・佐野正之・奥山竜一・酒井善久・宇喜田宣穂「英語の指導力を伸ばす アクション・リサーチの進め方」『英語教育』4月号～3月号(1998～99)

参考資料1 指導案、授業ビデオ、授業後のまとめと指導助言者のコメント

小学校A教諭の例

- ・本時の目標：“What's this?”“It's a ○○.”の言い方と36個の物の名前をゲームの中で楽しく覚える。
→この数はどれくらいが適当なのでしょう。生徒達にとって comfortable な数を考えてみてください。覚えられないことが苦痛にならないようなケアがあれば大丈夫だと思います。
- ・3人のTTを行ったが大きな変化となって生徒に新鮮に写ることが出来た。
→どのような変化だったでしょう。もう少し詳しく

く教えてください。

- ・活動を楽しむという面で成果があった。
→それはどのようなところから分かりましたか。
どの児童がどこでどのように反応していたか記述
してみてください。
- ・子ども達の振り返りの時間を大切に自己評価や
感想を残していきたい。
→どのように「振り返り」を行わせることを考えら
れていますか。
→ジャーナルを書かれるときに従来していた観察
をさらに一步踏み込んだ観察を試みてみてくださ
い。何気ない動作、表情から生徒・児童の中の学び
を妨げる問題や喜びが発見できるかもしれません。

小学校B教諭の例

- ・歌による英語は児童にとっても受け入れやすい。
→なぜ歌が効果的だと思いますか？
- ・児童による簡単な評価カードを継続し、授業の改善
をしたい。わかりにくい児童がいたのでつまづいて
いる所を繰り返し練習したり時間をかけたりする必
要があった。
→子ども達と一体になった授業は印象的でした。
予期しない児童からのフィードバックに注意して
みてください。

高等学校C教諭の例

- ・ Some students had forgotten to do their
homework. I wanted them to know not doing
homework was not good for them. But they
didn't care.
→ So, what do you think are the reason? What
are your next actions?
- ・ I wanted to ask questions in English but students
seemed not to understand. I added some explana-
tion in Japanese. I thought I had to use English
more.
→ Why do you think so? What students'
response to this addition? Did it work well?
→ What skills do you want to work on
through this class? Class needs to be designed
based on this. What is your role to achieve
this goal?
自分の立てた目標(どんなにシンプルなものでも)
に対して自分の役割は何で、どう向かうかをもう
少し考えてみてください。

高等学校D教諭の例

- ・生徒から退屈さを思わせる発言も出てきているので、
音読・翻訳という単純な流れを改善しめりはりのあ
る50分にしたい。
→ Nice you took a message from that. Where
does this message come from? Only from
the boredom? Anything else? What do you
think you need to do to make this change?
→ How did you achieve your teaching goals
today? Your own assessment is necessary at
the end of the journal.
→ Class is rather quiet, but it doesn't mean
students' engagement level is low. Students'
look quite relaxed and are involved.
→ How do teachers check students' understand-
ing on the story? Translation? I don't oppose
the use of translation, but was that the only
way to check Ss' understanding of the story?

→ Activities need more variation.

→ ALT's seated at the end of the table. Is it
the best place?

参考資料2 アクション・リサーチテーマ一覧

小学校

- ・自ら考え主体的に学習する授業
- ・授業の中において的確な発問や指示をする
- ・適切な言葉で指示と発問をする
- ・的確に発問や指示をすることをめざして
- ・待つことの重要性

中学校

- ・ Interesting で rhythmic な授業の実践
- ・ 英語の歌で英語好きに！
- ・ Speaking能力の向上
- ・ 少人数クラスで個に応じた細やかな授業の実践
- ・ 生徒の学習態度に及ぼす教師の影響

高等学校

- ・ 生徒が活動できる Reading (英語 I) 授業→
プリントを使った効果的な活動を考える
- ・ 生徒が充実感をもつ授業と読解力向上を目指し
て
- ・ リーディング力の向上を目指して
- ・ 積極的なコミュニケーション活動を目指して
- ・ 理解される授業づくり
- ・ 生徒が自信を持てるような工夫
- ・ 少人数クラスにおける効果的なプロジェクト・
ベースの学習
- ・ 環境デザインの構築をめざしたアクション・リ
サーチ総合学科選択科目「英語絵本」におけ
る授業実践ー
- ・ 音読指導と発問の工夫
- ・ 大学入試に向けてのさらなる読解力向上を目指
して

参考資料3 研究講座後のアンケート

＜質問＞「アクション・リサーチを行ってみて先生ご
自身で収穫はありましたか。」

- ・ 子供の姿と自分の姿を重ねて受け止めることを学び
ました。(小学校)
- ・ 嫌な部分にも目を向ける努力をしたこと。人の良い
部分を吸収したいと参加しましたがそれ以上に大切
な自分のマイナス面を振り返ることが大切だと気づ
きました。(中学校)
- ・ やはり「内省」をしようとする姿勢でしょうか。あ
る意味、現実を知る(受け止める)ことで、その先
にある自分(より満足できる自己)をイメージしよ
う、作っていかうとするエネルギーを生み出して
くれる源になるのが、「内省」する心であると感じて
います。(高等学校)

参考資料4 図1 'Reflective cycle'

